

骸骨天使たち

後藤敏斤

墮落した肉体に愛想をつかし

その内部に潜む不満だらけの

骸骨たちが飛び出して

無垢なままダンスを踊りだしたのなら

どれだけ心地良いだろう

地上に降りてからというもの

この虚飾だらけの肉と皮

朽ち果てるより先に腐れ切った

偽善に満ちた得意顔の

贅肉や上塗りを思いつきりはがしてしまい

天帝に言いつける

悪行の数々を

それだけじゃない

この聖なる瘦せぎすの天使たちは

昼夜を問わず裏も表もさらけ出し

語り始める不平の数々

まくしたてる持ち主への罵詈雑言

歓喜とも怒りとも言えないあどけない表情で

我慢仕切れず自らの潔白を身で示す

そう 審判の日など待てないさ

地球は底まで冷え切ったままの

大きな雪だるま

重心のズレた大きなコマとなつて
乱れた樽円で回っている
そんなアイスバーンの舞台の上で
この輩は踊りだす

月夜の下で暴れだすお道化た人形たち
影などないさ

彼らの白さがすべてを反射してみせるもの
後悔などあり得ない

下を向いてる場合じゃないぞ
葬列など後にしろ

窪んだ眼は虚無へと続く

地上には酸素の雪が降り
照明も無し

化粧も衣装もお構いなしのこの勝手ぶり
怪しげな糸で操る傀儡師たちも

これじゃお手上げさ

危うげな

朽ちることない造花の悲しさも

書き殴ったように付着した赤錆の怒りも

愛しきその無表情の聖人たちのダンスに

瞠目するやら祈るやら

邪な報酬など不要なまま

喝采の代わりに静寂が賞賛を送り

誰にも聞こえない金切声の歓声

それも いつしか消えている

馬の国から

後藤敏斤

見知らぬ送り主からメールが届いている
何処からか いつの時代かさえ分からない
でもウイルス危険度は低なので
開いてみることにした

現代のヤフーたちよ

まだ空も星も海もその輝きを忘れていないはずなのに
木々も鳥も花もまだ色どりを保っている
陽が射す その中で真つただ中に

乾き切った見えない壁に仕切られたまま
君たちはひたすら精を出す

滑稽なまでに真剣に

壊れた定規よりも腰を折り

愚直なまでに

日時を過ごす

誰の顔色を伺うか

今日の天気より気まぐれな機嫌を気にして

止むことなき要求 理不尽な申し出

腹立ちまぎれの従順

そして ときおり

それは夢だ感動だ理想だ

究極だよ 星空の彼方だ

愛情だ友好だ神話だ

兼ね備えた勇氣だ

胸に光るバッジだ 勲章だ

理想郷さ 憧れだ

何だろうか？

キラキラと無駄に光るものに憧れる

誰が落としたか

大皿の隅に浮かぶひと塊りの油膜

キラキラと

掻き寄せても掴まらない

引き寄せるたび遠のいていく

現代のヤフーたちよ

君たちが追いかけて求めるものは 何かこの

四角い渦の中で飲み込まれながら

画面を見ているようなもの

あがいても逃れられないまま光を追っている

きつと胃袋が空になっても外に出ることは無い

角な入れ物に押し込められて

労働を強いられる捕囚たち

君たちが知るものは

すべてにおいて

情熱だよ感涙だ取り繕う密かな汗だ

だけど

押し込められた想いはスクリーンの中

ときおり流す涙は乾き切っけていても

無駄に腰をおり 笑顔をしめし

気をつかい お茶を汲み 周りに思い悩む

馬の国より

そんなメールを気にしながら

会社の宴会に出席していると

一人のお調子ものが

酒の力を借りながら

頭から馬の着ぐるみを被り

おどけた調子で 日ごろの不満をぶちまけて見せる

終いには

不気味さと滑稽さを取り交せて

どこか皮肉な笑い声にも似た感じで

ヒヒヒヒーンと皆の前で嘶いてみせた

手持ちの楽器が無いのなら

後藤敏斤

丸腰に吹き抜ける

ポケットは収まらない欲で溢れて大きな穴

心身ともに揺らいで

頼りない胃袋も空っぽなら

過去も現在も居場所の無い身は

未来への期待で詰まっている

行きたいところはあるけれど

遊星のかなたにまで辿り着きたいんだ

だけど片道切符すら見つからない

例えば手持ちの楽器が無いと知ったなら

自らが楽器となって奏でてみせる

僕の魂の音が

生まれたばかりのA音で始まって

いかれたリズムに震えてみせる

ふざけたステップ

おどけた調子

出鱈目な和音

君の奏でる楽曲も

今までには聞いたことのない

鬼神すら呆れ返るほど飛び出して

僕自体から刻みつけたリズム

指を鳴らすか ステップを踏むか

手持ちの楽器が無いのなら

踏みつけられても馴染めない
どこかこう 奇怪な調子

カタカタと全身ひるんだような
骸骨の頑固さをそのままに

大空の月も日もその旋律を怖がり聞き流す
恐ろしい程愚鈍さの繰り返し

見ているものは欠伸を噛み殺す

壊れた僕からこぼれ出す旋律は

外れた調子が抜けきれない

可笑しさと切なさが合体し

あなたにも追いつかず

届かないと知ってはいても宙へ叫ぶ
どんな声だ？

魚市場の掠れた威勢

気絶寸前の甲高い悲鳴

突きを入れるときの気合

兵卒を仕切る号令

怒れる人の罵詈雑言

まだまだその程度の声では無しさ（けたがちがうよ）
ならば成績評価で表してみれば

ときおり激昂する傾向が

（そりゃ きげんのわるいときだって）

短絡の兆しあり

（まさか せいじんくんしじゃあるまいに）

僕の声は やってくる

後押しする千程の餓鬼たちと共に 足並み揃え

この聖歌隊ときたら

擦り切れた上衣は継ぎ接ぎだらけ

腐りかけた歓喜

あんぐりと開け放された口から

始末におえない涎やら そして雁首そろえ

現世への未練を訴えたいがゆえ喚き散らす

まとわりつく餓鬼たち

いつさい收拾つかず

蹴飛ばしても執拗にしがみ付いてきて

玉砂利の魂が押し掛かる

もはや祈りではなく呻き声

遺恨の念に捕らわれて木霊した

行き場所を失って嫌悪の目で衆人に晒される

それでも

暮れていくんだ

殺伐としたこの聖歌隊が声を揃えて歌うのを癒すように

涙を出し切り掠れて果てるのを見届けた後で

落ち日が抱きしめる この静寂とけたたましさを

土に還れぬプラスチックの悲しさを留めたままに

彼らの雄姿を跡付けて

賛美するんだ 血気盛んな赤々とした空が

総立ちの群衆の代わりに称えたかと思うと

やがて 幕引きよりしなやかに消えていく